

高校生とともに学び、つくりだす地域

いつでも帰ってくるここのでできる場

■今号のねらい

今号は、地域社会の中の高校生の居場所に着目する。ここまでの2つの号では、「地域社会に関わる高校生が増えていくこと、そしてそれを受け止める地域社会側の体制づくりやともに育ち合う姿勢、さらに地域活動に参加する高校生の動機を示した。動機については筆者らの調査結果からユニークな視点として、高校生は活動テーマへの関心や社会貢献したいという意識とは別に、仲間と一緒に楽しめるか、知り合いがいるかといった点が、特に活動経験のない高校生にとって重要なことを示した(注1)。地域活動の参加

に主体性を見出しにくい状況は少なくなく、コーディネートする際に重要な視点だ。これらのことを踏まえた時に何かを「やってみる」の前に、学校と自宅だけでは足りない自分らしくいられる「過ごす」場が重要なのではないかということである。そこではまだ見ぬ何かとつながり、また他者と時間や空間を共有することで、新たな学びや発見が生まれるかもしれない。

■あなたのまちにサードプレイスはあるか

サードプレイスとは何か。古くて新しい



働く女性の地域の居場所「ディアナ横濱」。子どもを介さず、また日中地域にいなくとも、地域暮らしを楽しむコミュニティスペース@横浜市(筆者撮影)



石井 大一郎

(国立大学法人宇都宮大学
地域デザイン科学部 教授)

地域づくりの大切なキーワードである。コミュニティカフェはその典型である。ここ10年くらいで子ども食堂をはじめとした子どもの居場所は拡大した。高齢者サロンや認知症カフェもある。こうした多様な居場



子どもを真ん中に、大人になっても気軽に立ち寄れるみんなの居場所「地域駄菓子屋」運営はNPO法人シェアッピーエール@宇都宮市(代表者並木氏より提供)

所はサードプレイス(注2)の一つかもしれない。ではそうした居場所がなんでもサードプレイスなのかと言えば決してそうではない。オルデンバーグは、「サードプレイスは人々を対等にし、エンパワーする場である」「人々が、目的や義務や役割という背景を超えて個性と関わり合う、楽しみ、快活さ、気晴らし、以外に何の目的もなく集まる場であり、こうした経験により人々は最高に民主的な経験ができ、より豊かな人間になれる」としている。地域づくりにおけるサードプレイスの存在は不可欠なものであろう。サードプレイスのあるまちとないまちでは笑顔の数や人と人のつながりの数も違うかもしれない。

■サードプレイスにおける「常連」の存在
サードプレイスには図1のような8つの特徴が挙げられている。筆者が最も注目するのは、⑤の常連である。サードプレイスは、「常連がいて、空間やトーンを形成する。その場所らしさを彼らがつくる。新たな訪問者を惹きつけて、新参者にも優しい」とし、場の形成において常連の重要性を説いている。言い換えれば常連がどのような役割をもち、どのように振る舞うのかによってサードプレイスの質が変わるということである。常連が生み出すその場所らしさは常連の属人性に依存してしまし、属人性が重要と捉えることができる。常連は特定の誰かというより、イメージとして私たちが持つのは、よく見かけるAさん、Bさん、Cさんというように複数人いる。常連の持つ属人性という観点から捉えれば、複数人による属人性が混ざり合っている場所らしさが生まれるということである

- | | | | |
|-------|------------|-----------|--------------|
| ①中立領域 | ②平等主義 | ③会話が主たる活動 | ④アクセスしやすさと設備 |
| ⑤常連 | ⑥控えめな態度・姿勢 | ⑦機嫌がよくなる | ⑧第2の家 |

図1：オルデンバーグが定義する“サード・プレイス”の8つの特徴

る。居場所の運営において大事なことをサードプレイスの理論から整理すれば、①常連が生まれること、②その場所らしさを常連の属人性によって作り出すこと、③複数人の常連がそれぞれの属人性を發揮すること、ということになる。高校生のサードプレイスでは、3年間という限られた時間を彼らが過ごすことを考えれば、常連の入れ替わりのピッチは早く、常連とともにある場のデザインは簡単ではない。常連とともにある場のデザインというキーワードを頭の片隅に置きながら議論を進めてみたい。

■事例：高校生びいきのコミュニティカフェEMANON(福島県白河市)
筆者が全国の中でも高校生の居場所として最も関心を持ち、研究室として調査研究に取り組んでいる事例である(注3)。人口6万人の大学のない福島県白河市の市街地にある「高校生びいき」のコミュニティカフェEMANONである。
2015年、当時大学院生であった青砥和希氏を中心として、高校生のためのサードプレイスを作るための団体「EMANON準備室」を設立した。約1年間をかけて、築90年の古民家をリノベーション



EMANONの外観(青砥氏提供)

し、2016年に営業を開始したいわゆるコミュニティカフェである。カフェの名前は、NONAMEを逆にしたものであり、この場所の名前をつけるのは、そこを訪れる人自身であるとの想いがある。週5日オープンし、高校生を中心に誰もが利用できる。メニューは福島の素材を生かしたスイーツも充実し、高校生でなくとも訪れたいくなる白河市中心市街地の交流拠点となっている。市からのコミュニティ・スペース設置事業委託費と自主事業であるカフェの収益及び寄付金を主な収入として運営している。高校生は注文を



EMANONの様子(青砥氏提供)

することなく利用でき、注文する場合でも学割で注文できる。日常のひとときを過ごす場所として、地域内外の人や情報が繋がる交流拠点として活用されている。また、高校生の地域とのつなぎ役も担っており、地域の活動のサポート役となったり、高校生自らのやってみたいをカフェのスタッフが支えている(事業名…うずうず)。

■「過です」「つぶやく」が大切にされる空間
EMANONの機能を整理すると次のようになる。日常の「うずうず」ことを大切

にし、そこを訪れる高校生がつぶやくことのできる(そして、それを受け止める)機能が秀逸に、自然な状態で機能している。年齢の近いお兄さん、お姉さんがスタッフをしていることも安心してつぶやくことのできる場を支えている。EMANONが公開している資料と代表との意見交換をもとに、つぶやき機能をみてみると、①「あったらいいな」とつぶやくと、地域の大人が叶えてくれるかも、②「やってみいな」とつぶやくと、一緒にやりたい人が現れるかも。③「困ったなあ」とつぶやくと誰かがその話を受けとめます。④スタッフや大学生が話を聞きます。としている。こうした気きは高校生から自然に起こることもあれば、スタッフからの声かけによることもある。こうした日常的な会話为重視され、その先に利用者やインターン生としてそこにいる大学生に進路や勉強の相談をしたり、学校での探究の時間の相談、ボランティアの相談(相談機能)、EMANONの自主企画への参加、自分の興味関心から始めるマイプロジェクトの実施支援(活動支援や橋渡しの機能)がある。筆者が特に注目するのが、常連の代わりとなる高校生時代にここを利用し卒業した大学生やインターン生の関わり

である。彼らはつぶやきを受け止めたり、日常的に相談できる場の質を支えている。自らがそこで学び、充実した時間を過ごした経験者たちが週末、長期休暇、イベントなどの際に対面はもちろんオンラインでも帰ってくる。特定の誰かではない、また高校生当事者でもない、時々いるこうした常連たちによって、心理的に安全な状況が生み出され、その場所らしさを引き継いでいる。

■時間を超える関係人口づくり〜いつでも帰ってくる〜ことのできる場所〜

ここまでの議論をもとにサードプレイスとして高校生の居場所の持つ意味を整理すると次のようになる。常連の存在により安心して過ごせる場となっている。

これは前号で示した通り、小中高と年齢が上がるにつれて居場所がないと答える人の割合が増えていることを踏まえると私たちの社会の中に不可欠な空間である。高校生の居場所が多様な姿で誕生することが望まれる。次につぶやきを受け止め、相談に乗ったり、地域社会や大人に橋渡す役割を担っているということである。そしてEMANONが8年に及ぶ活動の中で示してきたこととして、高校卒業後

にいつでも帰ってくる。ことのできる場所になっていたというこ
とである。特にこうした地元との関係性を維持する機能は、定住人口が減少する地方のまちづくりにおいて不可欠な視点であろう。

サードプレイスは、a. そのまちの空間的な象徴であるとも

心に心のより所であり、b. 人と人、人と関心がつながる場所でもある。さらに、そうしたモノ・ヒト・コトとの接触だけでなく、c. 時を超え関係人口「時間をつなぐ」役割を持っているということである。

以上のことは、高校生の居場所に関することだけではないことはすでにおわかりであろう。高校生びいきのコミュニティカフェEMANONから学ぶ普遍的な要

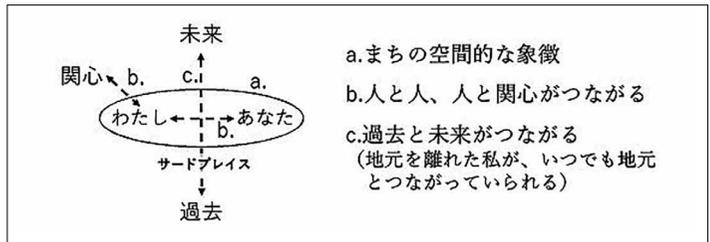


図2: 関係人口を育むサードプレイス

素として、これからの居場所づくりに活かせるものだ。

■読者のみなさんへの問い

「あなたの地域に、いつでも帰ってくる
ことのできる居場所はありますか？」

「そこには、属人性を発揮する複数の常連はいますか？」

(注1) 石井ほか(2023)：石井大朗、

黒田聡美、小柳真一、ボランティア経験のない高校生のグループ活動を促す支援と配慮に関する研究、日本福祉教育・

ボランティア学習学会誌vol.40,2023:7

(注2) レイ・オルデンバーグ／忠平美幸訳、サードプレイス、みすず書房、2013,p71

(注3) 元利用者で卒業後のEMANONとの関わりについてインタビューを行った調査の成果は、石井大朗研究室鈴木

木萌2021年度卒業論文「大学のないまちにおける高校びいきの居場所型カフェ利用者の意識変化」高校卒業後の

関係人口形成に向けて」を参考にして

いる。